

揺るがせ衝撃、異次元
に届くまで

スターク（元：はぎほぎ）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ディープちゃん「スズカさんが欲しい」

スぺちゃん「あげませんッ！」

スズカさん「嘘でしょ…！」

目次

- 馬編―ぼくは君になりたかった【前編】 1
- 馬編―ぼくは君になりたかった【中編】 8
- 馬編―ぼくは君になりたかった【後編】 21

馬編―ぼくは君になりたかった【前編】

やったやったと、ぼくは歓声の中を軽い足取りで歩く。今日はニンゲン達にとつて大事な日、そしてぼくにとつて大事な駆けつこの日。それに勝つて、褒められたんだ。

いつもとは段違いに長い距離だった。お陰で一周した時に「ここが最後だ」と勘違いしちやつたのはぼくのミス。あの時、背中の兄ちゃんが止めてくれなかつたら大変な事になつてたかも。

そうそう、兄ちゃん。兄ちゃんがいつぱいいつぱい褒めてくれた、その事が一番嬉しかった。一番最初の駆けつこからずっとぼくに乘つて、ぼくを叱つてくれて、ぼくを勝たせてくれるお兄ちゃん。そんなお兄ちゃんが、ぼくは一番好き。お兄ちゃんが仕掛けて回る最後のコーナー^曲が、心地よくて仕方がない。それで今日も皆を抜いて、1番早く走り抜けたんだもん。

そんなお兄ちゃんは今、ぼくの背中で前足から三つ細いの（ニンゲン達が「ゆび」つて呼んでるヤツ）を伸ばしてる。どういう意味かはよく分かんない。きつかしよう？だとか、さんかん？だとか何だとか。

あつ、降りるの？どうぞどうぞ、また乗つてね。

「ありがとうな、ディーブ」

お兄ちゃんの優しい鳴き声、これも好き。意味は分かんないけど心地良くて、今すぐ顔を擦り付けたい。でもいつも世話してくれるヒトが引つ張つて来て、引き離されてしまった。

「ブルルルツ!!?」

「お前はこつちな、お坊つちやま君」

少しぐらい良いじゃん、と思つていると被せられる布。うー、さつき首に被せられたのといいヒラヒラして落ち着かないよー。

ていうか、前の前のレースの時もそうだったけどニンゲン達がうるさ過ぎ! もうちよつと静かに出来ないのかなあ、他の馬達みんなもそう思うでしょ?

あつ、ぼくしかない……

でもまあ、お兄ちゃんも世話してくれるヒトも皆幸せそうだし、ぼくも幸せだし、良いかなつて。そう思つてた。

その時までは。

「いやあ、凄いですねディーブインパクト! サイレンススズカとどつちが凄いですか!?!」

お兄ちゃんが降りた方向から聞こえて来たのは、そんな声。他の声にかき消される程度には大きくなかったそれを、ぼくの耳が鮮明に拾ったのは、きつと。

「今する質問が、それですか」

お兄ちゃんが怒ったから。

ぼくはすぐに分かった。多分、お兄ちゃんをよく知るニンゲン達もすぐ分かったと思う。

それぐらい、背中越しでも分かるくらい、お兄ちゃんは怒っていた。静かに、でも確かに。

「あつーすす、すみませんっ!」

「……ええ、大丈夫です。では」

お兄ちゃんが怒りを解いて、やっと時間が動き出す。さっきの事なんて誰も無かったみたいに、お兄ちゃんも他のニンゲン達も笑顔を振り撒きあつて。

でも、ぼくは。

「デープ?」

動けなかった。「サイレンススズカ」というその音が、ぼくの耳から離れなかったか

ら。

あの時お兄ちゃんが見せた怒りが、今も顔に落としている影が、頭から離れないから。

ねえ、お兄ちゃん。

そのサイレンススズカって、誰の事なの？

誰が、お兄ちゃんを悲しませてるの？

お兄ちゃんは答えてくれなかった。その後も、その次の日も。その目に隈を浮かべていて、ぼくに乗り辛そうにしても。

その答えを知ったのは、少し経った日の事だった。

『サイレンススズカ？ 面白いや母ちゃんから聞いた事あるような』

『ホント!』

『うおっと、すげえ食いつきだな』

あの日からサイレンススズカの事が頭から離れず、夜も眠れない：訳ではなかったけどあんまり物事に集中できなくて。仕方がないから隣や向かいの部屋の馬達、更には練習やその行き帰りですれ違う馬達に“サイレンススズカ”について聞いてみてた。こ

れまでは特に成果を挙げれてなかったんだけど、やっと知ってる馬に出会えたんだ！

「デイ、デイープ!? 待て待て、どうした」

「あれ…サムライハートが気に入ったんですかね？」

『ニンゲン達が困ってるぞ』

『良いから、引き離される前に早く教えて!!』

『まあ良いけど…でも、俺も詳しく聞いてた訳じゃないからなあ』

あんまり乗り気じゃなかったけど、なんとかゴリ押しで話を聞き出す。数少ないチャンス逃したくない、その一心で。

『俺の母ちゃんはエアグルーヴって言うんだけどさ。なんか暑くなり始める時期のレースで、とんでもねえ速さの馬にぶつちぎられて負けちゃったらしいんだ』

『それが…サイレンススズカ?』

『ああ。その前から何回か会ってた仲だったらしいんだが、母ちゃんとしてはその一回が特に忘れられないらしい。それはそれはすんげえ逃げっぷりだったと』

『……逃げ』

後ろから全員抜いちやう僕とは真逆の走り。ずっと前で駆け抜けて、後ろを置き去りにする走り。

それが、サイレンススズカ。

お兄ちゃんは、その背中に乗ってたの？

『つとと、どうやらここまですしい。また会えるかは分かんが、話の続きはその時にな』

『…うん、ありがと！』

『頑張れよ、俺ら世代のエースさん!!』

サムライハート君からの応援を受けて、ぼくは上の空だった気分を引き締め直す。そうだ、ぼくは一回も負けた事が無い強い馬なんだ。お兄ちゃんがどんな強い馬に乗ってようと、今のお兄ちゃんを乗せてるのはぼくなんだ。

サイレンススズカ
過 去になんて、負けるもんか！

そして、その日の練習で。

眩しい輝きを放つ栗毛の影を、見てしまう。

それが、ぼくの馬生が変わった日。

馬編—ぼくは君になりたかった【中編】

今の僕の相棒はデイーブなんだ。

素晴らしい馬なんだ。

デイーブを栄光に連れて行く事に、今は集中するんだ。

そう頭では分かかっていても、ふとした瞬間に見てしまう。

彼と共に見た景色の思い出を。

デイーブと走った芝^{ダー}2400の栄光に、彼と得る筈だった芝^{ジャ}2400^{パン}の面影を。

後方からデイーブと追いつける時、その視線の先を駆ける彼の幻影を。

もう君は、どこにもいないのに。

何故思い出してしまうんだろう。

なぜ今になって振り返すのだろう。

彼とデイーブを比べたあの質問の所為？ いや、違う。目を背けていただけだ。

デイーブと出会えて、埋めた筈の心の穴。でもそれは埋めたんじやなくて、隣に築かれた山で隠しただけという事。

その山が、穴を埋めるに足る程の輝きを放つからこそ露呈した闇。

デイープと、彼。

鹿毛と、栗毛。

追い込みと、逃げ。

彼らが得る景色は違う。当たり前前だ。一緒くたにする方がおかしい。デイープは

デイープ、彼は彼だろう。

何故、埋め合わせられると思った。

なんて事はない。二頭を比べていたのは、他ならない僕じゃないか。

「……ああ、……っ」

あの日曜日。彼が僕を投げ出していけば。

僕がすぐに降りていけば。

いつそ手綱を離して地面に打ち付けられていけば。

君に、「転ぶ」という選択肢を僕が与えられていけば。何か、変えられたんだろうか

？

問いに答えてくれる存在は、もうこの世にはいない。

その沈黙は、僕の心に巣食い続ける。彼が虹の向こうに消えたその日から、ずっと。

く
く
く
く
く

日に日に酷くなっていく顔色を押して、お兄ちゃんはぼくの背にまたがった。その顔を見る度に、ぼくは“サイレンススズカ”への怒りを燃やす。

お兄ちゃんを悲しませるなんて許せない。ぼくが絶対に、今日こそぜーつたいに笑顔にするんだ！

「——さん、アンタは」

「大丈夫です……っ、いこうデーパー」

いつも通りの、でもいつもより固くなった声を受けてぼくは歩を進める。

今日はニンゲン達がいっつもオイキリ追い切りって呼んでる練習だ。馬房おうちの仲間達うまと追いかけて合つて、最後に抜き去るヤツ。

『よろしくね』

『よろしくー』

『おう』

声を掛け合つて、コースに入るなり開始。お兄ちゃんもスツと姿勢を変えて、調子の悪さなんてまるで見せない。

前の二頭ふたりを先に行かせて、一周の最後に追い抜かす。ぼくの持ち味を一番活かせる、そして本番で活かす為の練習。

でもいつもと違うのは、今回は本番さながらの本気で走るって事。

(お兄ちゃん、見ててね)

ニンゲン達は馬達の走りを見て大きな声を上げて、驚いたり泣いたりする。つまり心を大きく動かされるって事。それは、背中のお兄ちゃんだつて同じ筈だ。

サイレンススズカつてヤツの走りがどれ程の物だったのかは知らないけど、それはそれは凄かつたんだらう。周りから褒めそやされるお兄ちゃんが、今も忘れられないぐらいに。

でも。

(ぼくの方が、絶対にすごいもん)

ムハイサンカン？つていうぼくの称号は、ぼく以外にはとある一頭の馬しか達成してないらしい。そしてその馬の名前は、ニンゲン達の話聞き取れないなりに盗み聞きした上では、少なくとも“サイレンスなんちゃら”ではなかった。

つまり、ムハイサンカンを取れてないサイレンススズカはすごいくない！取れてるぼく

の方がすごい!!多分!

だから今回のオイキリで、凄いタイムとか末脚とか出してお兄ちゃんを驚かせてあげるんだ。それで、サイレンススズカの走りよりも強く強く覚えてもらう。そうすればお兄ちゃんはサイレンススズカなんて忘れて、ぼくに夢中になって元気になる。うん、ぼく天才!

「デイトプ」

あっ、ゴメン
「ヒンツ」

なんて考えてたら、集中してないのがバレて怒られちゃった。流石はお兄ちゃん、なんて考えてる場合じゃない。目の前の事にしっかり向き合わなきゃ、お兄ちゃんを驚かせるなんて……

とあって、前を見たその時。

『…あれ?』

ぼくは、ぼくの置かれた状況が少しおかしくなっている事に気付いた。

『ね、ねえ』

『ゼエ、どうした』

『菊花賞馬さんは息も上がらねえのか、こちとら必死なのに』

ダメだ、前の二頭も気付いてない。その上に乗ってるニンゲン達も。見えないの？なんで？どうして？

『前にもう二頭いるじゃん……！』

ぼく達のコースで、ぼく達の先を行く茶色いお尻。その向こうに見える後頭部には、草と同じ色のメンコおめんが被せられているのが首の上げ下げでチラリと見えた。

そんな馬が、トロトロ走る二頭を置き去りにしていく。その後ろを走る、ぼくもまた。

『早く行かないと、追いつけないよ！』

『何言ってるんだ、誰を追いかけりや良いんだ？』

『今回走るのは俺達だけだろう』

『違うよ、そうじゃない！』

そうは言ってみたものの、ぼく自身もよく分からない。今言われたように、この走りはぼく達3人だけで行われている筈で、でも

“あの馬に追い付かなければならない”

つて焦りが確かにここにあつて。

「お兄ちゃん
「ヒヒインツ!!」

最後の望みを懸けて、背中のお兄ちゃんに託してみても。

「……落ち着け、デイーブ。慌てるな」

やはり駄目だった。そうしている間にも、その馬はどんどん走って先にコーナーを曲がって行く。

そして、その最中。その馬と目が合った。

——来い。

……ああ、くそっ！

「なっ、!？」

『ディープ、どうした!』

周囲の制止も、お兄ちゃんの手綱さえも振り切って全力疾走。振り落したりはしない、でも手加減なんて出来ない。

あのままだったら追いつけなくなる所だった。ここしか無いんだ、無かつたんだ！お兄ちゃん、ごめん！

「何があつたディープ!?!くそっ、どうして急に……」

頭上から聞こえる苦しい声に申し訳なくなりながらも、ぼくは足を止めない。なんとか前を走る馬の後ろにつけて、様子を伺う。

近くに来てようやく分かったけど、とても綺麗な走りだった。流れるように運ばれる

足に一切の淀みは無く、コレがぼく達馬の理想形だと言われても素直に信じれてしま
いそうな程に。

『何だよお前！ぼくに何か用なの？』

『…』

『なんか言つてよ!!』

イライラしてしまつた理由は、ぼく自身にも分からない。日々溜まつていた分が、八
つ当たりみたいいに吹き出しちゃつたのかも知れない。

でもこの時のぼくは、どうしてかその怒りが正しい物であるかのように思い込んでし
まつていた。そしてその理由も、一瞬後に否が応でも理解してしまう事になる。

その馬はコーナーで一層体を傾けた。最後の直線に入る前、そこで出す全力に備える
ように。

そしてその傾きで、彼の胸に掛けられた布が見えた。そこに書かれた、ニンゲン達の
文字も。

読めない筈なのに、その時だけは直感で理解してしまつた。何という名前が、そこに
あつたのか。

『お前は——ッ!?!』

瞬間、信じられない光景がぼくの目の前で巻き起こった。その馬は今までずっと前で走って消耗していた筈なのに、そんなの知るかとはばかりにぼくを突き放したんだ！

今までこんな馬、相手にいかなかった。でも負けられない、負ける訳にはいかないんだ！！

「何を、何を追ってるんだデイープ！」

お兄ちゃん、それどころじゃない！お願いだから邪魔しないで！！

ああ、むかつく！あの馬にも、それを追ってる内に楽しくなってきた自分にも！だって初めてなんだもん、こんな速い馬と戦うなんて！

「……くっ！」

すると意思が通じたのか、背中が軽くなる感触。でも振り落とした訳じゃない、お兄ちゃんは今も背中にいる。

やつぱりお兄ちゃんは凄いや、と思うと同時に、ぼくは彼の後を全力で追い上げた。届かない、でもちよつとずつ詰めてはいる。いや全然だ、彼はまだ速くなるだろう。なんとなくだけど分かるんだよ。

最後の直線で追い越す為には、もつと！もつと速く！今までのぼくなんて置き去りにする勢いで、この瞬間に成長し続けるんだ！！

『……』

『だから！その無言を！やめてって!!』

死に物狂いで並びはしたものの。また視線が変わるけど、彼は何も言ってくれない。その度に僕の苛立ちは高まるばかり。

『負けられないんだ、お前だけには!』

叫ぶ。その音も自分の力に変えたくて、全力で。

『お兄ちゃんの為にも、お前だけには!!』

一瞬、彼の表情が強張った気がした。でも瞬きしたら元通りだったから、多分気のせい。
い。

コーナーでは追い越し切れない。でも最後の直線、足が残っている方が勝つ!

いくぞ、勝負——

『………え?』

気が付くと、彼はどこにもいなかった。

僕の前にも、横にも、後ろにも。

『え?』

体だけが動き続けて、でも心はもうここに無いような感覚。歩幅をそのままに首を傾けて周囲を見ても、あの草色のお面はどこにも見えない。

そのまま、ゴール。虚しさを抱えて、ぼくはコースを振り返った。

どこだ。

どこだ。

『……だ』

「え……」

どこだ。

『どこだツ!!』

やはりどこにもいない。なんで消えた。消えるならなんで現れた?

『どこにいる、サイレンススズカ——ツツ!!』

あらん限りの声で嘶いても、周囲は驚くばかりで答えてくれず。

我に返ったのは、オイキリ仲間が遅れて到着した後、お兄ちゃんが首を叩いてくれた時の言葉だった。

――

デイープの異変の原因は、僕はさっぱり分からない。

少なくとも騎乗前に異常は無く、騎乗後にもアクシデントなんて無かった。本当に、追い切り前、いや追い切りに入った直後まで本当にいつものデイープだったのに。

でも、乗ってて分かったのは、*「彼が前に行く何かを追いかけていた」*という事だけ。あのコーナーから最終直線に入って直後まで、デイープは何かを追い抜かず為ひた走っていた。滅多に出さない本気を躊躇も無く出して。

「デイープが、本気にならざるを得ない相手」

あの時、僕の目には何も写っていなかった。だからこれはオカルト的な妄想になるが……ある程度は絞り込めなくもない。

前の二頭になんて目もくれずに追い抜かして、まるで常時スパートみたいな力の入れ込みよう。置いていかれる事を避けてるみたいなの感覚を見るに、相手は相当な逃げ馬だろう。デイープが危機感を抱くほどの大逃げの。

……そんな稀代の逃げ馬なんて、一頭しかいない。

けれど僕に、その答えを出す勇氣は無かった。

「まさか、な」

いや、勇気ではない。これを正確に言い表すとするなら、恐怖。

今その名前を口に出したら、今度こそ僕は決壊してしまう気がする。だから、こうやって避けて蓋をする。

そんなの意味無いなんて、遙か昔から分かり切っていたというのに。

コースから出る折。僕の震えを、デープはしっかりと感じ取っていたらしかった。

馬編—ぼくは君になりたかつた【後編】

これじゃダメだ。勝てなかつたあの日から、ぼくはずっとそう考えていた。

負けたとは思っていない。実際、あのコーナーでぼくは彼に追い付いたんだ。

(でも、彼は本気を出してなかつた)

彼——サイレンススズカはあそこから更に速くなる。だから最後の直線が、ぼくと彼の決着の時だつたのに。

その前に、彼は消えてしまった。走り終えてどこを見ても、あの草色のお面も茶色の体も見つからなかつた。

そして、その走りでもお兄ちゃん的笑顔は取り戻せなかつた。

(ぼくじゃダメなんだ)

全力だつたのに、それでも影を取り去れなかつた。

お兄ちゃんに必要なのは、ぼくじゃない。

(悔しい)

あの綺麗な走りじゃなければ。

悔しくて、悲しくて。どうしようもなくイライラして。

でもぼくは、ぼくのこんなワガママよりもお兄ちゃんの方が大事だから。
だから、ぼくは——

「行こう、ディープ…ディープ？」

頭の上からの声に、僕は鼻息で返した。『うん』って意味と、『見てて』って意味で。

そうだ、ぼくはこのレースで

「シンボリドルフを、超えよう」

サイレンススズカに、なるんだ。

—————

『こりやいけませんな』

ゼンノロブロイは、噂に聞いた新星を前にため息を一つ。

限界を感じ始めたこの頃、今日この日に来るであろう衝撃にトドメを刺される予感があった。しかし……

『よもやその新星君があのような有様とは』

レース中でもないのに凄まじいプレッシャー。その出所に視線を向けながら、ゼンノロブロイは思わず後ずさる。

有様とは言ったが、決してマイナスの意味だけではない。覚えたのは、寧ろ恐怖。

『アレがまだ爆発を残してるとすると、本番が恐ろしいというもの……ああ、周囲はおろか乗ってるニンゲンまで惑わせてるじゃないですか』

自らにも一度乗った凄腕のニンゲンから発せられる戸惑い。見ればそのニンゲンもまた本調子ではないようで、『いよいよどうなるか分からなくなってきたぞ』と警戒心を高めていく。

とはいえこちとら厩舎いえのボス。斜陽といえど、若手には負けられない。

『そうは思いませんか？』

『なぜ俺に話を振る』

『近くにいたので』

『……』

その馬はすぐには答えない。ただ自らを鼓舞するように息を吐き、ゲートへと向かう。

『ゴールへと走る。それだけだろう』

俺たちがするべき事は。

言い捨てられたその言葉に、ゼンノロブロイは『そうですな』と返し。//5//と書かれたゲートに入っていく彼を見送ったのだった。

『うおっ…』

『ヒエツ』

ぼくが入っただけで、両隣から変な声が聞こえてきた。何かあったかな？

いや、何かあっても関係ないんだ。ぼくはこのレースで勝つ。勝つて、お兄ちゃんを助け出す。その為にも、他の事に気を使ってる場合じゃないんだ。

時間が惜しい、全部思い出す時間に費やせ。彼ならどうする。ゲートが開いた時、彼ならどうする？

決まってる。

《最強の衝撃》 対、歴戦の古馬。史上初の無敗の四冠へ、ディープリンパクトのスタートは…》

今だ!!

《良いスタートを切った！ここから後ろh…ええ!?!》

『なっ…』

『ハア!?!?』

「えっ——!?!」

ニンゲン達の声、周りの馬の声、そしてお兄ちゃんの声。

でもぼくは止まらない。

《ディープリンパクト先頭、ディープリンパクト先頭ですっ!!コレはどういう事だ豁ヲ
睽、折り合いはついているのか?!》

「ファッ!?!ウツソだろお前」

『ニンゲン達の話と違うじゃん!』

ええいうるさい!こんな聞こえないぐらい前へ、前へ!

彼ならそうした!ならばくだって!!

「ディーブ、落ち着くんだ！まだ正面スタンド前ですらないんだぞ！」

そんな事は分かっている。お兄ちゃんは前のレースで間違えて急いじやった時の事を思い出してるんだろうけど、でもぼくは止まるつもりなんて無い！

《ディーブインパクト未だ先頭、屋根の指示に全く従わない!?最早逃げも逃げ、大逃げの体制で第一コーナーを曲がりホームストレッチへ。全てが狂ったかのような中山競馬場2005年冬、先頭にはタップダンスシチーが食らいつくがどうなるか!》

『むりいゝ』

「くつ、下がるか……！」

まだだ。こんなモンじゃない。こんなんじやお兄ちゃんの求める彼には届かない。

もつと、見てる皆が目を見開くような差を……!

「つ、これは……」

お兄ちゃんの気配が揺らぐ。ぼくに彼の影を重ねてくれた可能性を信じて、ぼくは更にギアを上げた。

まだ1週目。まだいける、”きつかしよう”を走り抜けたぼくなら!

《混沌とかしたレース場に歓声が轟く中、1000m通過タイム出ました!57びよ……

え》

「え……」

「…あつ」

「おい、これって…」

《57秒台！これはあのサイレンススズカと同じタイムだ!?》

「「ワアアアアアアツ!!」」

いつもと違う、一瞬の途切れの後に爆発する声。でもぼくに、その意味を考える暇なんて無い。

がむしやらに足を動かすので精一杯だ、他に何も考えてられない。あの動きを、前に見たあの身体運びをなぞるのもう頭が…！

『…あつ、はア………!』

ヤバイ、思ったより息が苦しい！足も重い!!でもやめるもんか、まだいける!!!

サイレンススズカはここから加速するんだ！そうでしょ、お兄ちゃん！

「……くれ」

お兄ちゃん？何か言った!?

ほら、ぼくがサイレンススズカだ！その証拠にホラ、もう後ろがあんなに遠い！

「…め………れ………」

最後の曲がりだ！さあ、最後の力を振り絞れぼく！

お兄ちゃん、これでしょ？これがお兄ちゃんの求めたサイレンススズカでしょ?!

だから喜んで！頑張つて！早く手綱を、

「お願いだ。」

もうやめてくれ、デイープ」

え？

《これはまさか、まさかなのか！デイープにサイレンスの魂が宿ったかのような走り、今それが沈黙の日曜を栄光に変えるべく戻つて来たというのか!?!さあ最終コーナー、断トツの先頭で戻つてきたのはデイープ……これはどうしたデイープインパクト、ここに来て失速!?!》

背中に感じた冷たい滴は、きつと幻なんかじゃない。

手綱越しに伝わる震えた手の感覚は、絶対に気のせいなんかじゃない。

その事がぼくに、否応無く現実を突きつけてくる。

ぼくが、お兄ちゃんを泣かせたの？

足から力が抜ける。とつくの昔に力を使い切つて、もう回らない。息も底をついて、冷たい空気を吸い込んだ肺が痛い。

興奮で誤魔化していたそれらが今、一気にぼくに襲い掛かった。

『あ、あ、ああ……』

切り裂いていた風が壁になり、蹴り飛ばしていた土が足に絡まる。

無数の線になっていた景色が、止まっていく。

『若造』

聞こえてきたのは後ろから。いつの間に近付いてきていたのか、そこには一頭の馬がいた。

いや、それだけじゃない。ぼくが遅くなり過ぎて追いつかれたんだ。

『やってくれたな。お前の所為で、ニンゲン達の思惑は全部ご破算だ』

『ぐ、う、あつ』

『だが……自分を見失うような青二才が、出しゃばって良い舞台じゃあないんだよ此処はッ!!』

『……！待つ——』

《ディープリンパクト逆噴射、観客席から巻き起こる悲鳴を掻い潜つて飛び出たのはハーツクライだ！グチャグチャになった馬群を切り抜け、ディープに並ぶいや並ばない！華麗に差し切り一頭、全速力で直線に向かうー！》

黄色いニンゲンを乗せた彼は、そのまま飛ぶように走り去つて行つてしまふ。残されたぼくは、ただただ惨めで仕方がなくて。

何がダメだったのか、何がお兄ちゃんを悲しませたのか、ぼくは何を台無しにしてしまったのか。そんな考えばかりが頭の中で回り続けるばかりで。

『ぜえ、ぜえ、流石にもう限界ですか。引き時ですな』

更に横に並んできた5歳馬おじさんに気付くのも遅れる始末。そんなザマを晒すぼくに、おじさんは息切れしながら話しかけてきた。

『新星君、君が誰を追いかけてたのかは知らないし、興味も無いよ。けれどね、先輩として、その様相は頂けませんな』

『アナタは……』

『君は一体誰だ？』

唐突な、でもさっきの馬の言葉と通じるような質問。ぼくは咄嗟に答えられず、でも絞り出すようにしてようやく口に出れた。

『ディーブ…ディーブ、インパクト』

『そう、君はディーブインパクトだ。ニンゲン達は君をそう呼び、君に夢を託している』
何かを肯定するように、肯いたおじさんは、じつとぼくを見つめて言い放った。

『君はディーブインパクト。そして君が、追いかけてた誰かさんは、そうじゃないだろう？』

ハツとする、とはこういう事なのかも知れない。それだけおじさんの言葉はぼくの芯に響いた。そこにあつた記憶を、強引に掘り起こす劇薬だった。

暖かくなつてきた時の、一番最初の大きな皐月賞^{レイス}。そこでお兄ちゃんが、ぼくを撫でてくれながら呼んでくれた名前は。

その少し後、暑くなりかけの時の大きな東京優駿^{レイス}で、お兄ちゃんが口遊^{くちずき}んでくれた名前は。

サイレンススズカじゃない。

ぼくだ。

『ぼくは…ディーブインパクト。だッ!!』

「……………」

尽きた身体になけなしの力が宿る。残りカスのそれは、でも先程の“0”に比べれば無限にも思えた。

「ディープ……ああそうだ、まだ終わってなかったな……！」

決死の加速を繰り出して、先に行つたあの馬の背を追う。お兄ちゃんもそれに応えてくれて、待つていた鞭が飛んだ。

ありがとう。それだけで、ぼくはどこまでも走れる。

『やれやれ、私も負けたくないのに……悔しいですが、託すのが最後の仕事のようにすねっ……』

『うおおおおお!!』

今度は何も聞き逃さない。歓声も、罵声も、怒声も、皆耳が拾つていく。それを少しでも力に変えて、走り続ける為に。

“勝ち”をを目指す、その為に。ぼくに夢を託してくれた、お兄ちゃん達の為に。

《ハーツクライ先頭、これは決まっ……てない!? ディープインパクト来た、ディープリンパクト復活! 己の魂を取り戻した無敗三冠が、歴史を塗り替えるべく息を吹き返して迫くる! ハーツクライ逃げ切れるか!》

『嘘だろ!? 勝ち逃げ台詞のつもりだったってのに!』

『負ける…もんかあつ……!!』

近付く背中、でもまだ遠い！お兄ちゃんも必死で体重を消して制御してくれてるけどまだ足りない！

底力を探さなきゃ、探して絞り出さなきゃ!!

『ぼくが…皆の夢なんだアアア!!』

そう思った瞬間、力が湧き出る。これを出し尽くしたら今度こそヤバイという実感があつて、でも躊躇はぼくには無かった。

足の回りが早くなる、呼吸も早くなる。その分だけ体が前に進む、進む。

そして、並ぶ。

ここまでくれば、お兄ちゃん！

(今だっ！)

(うん!!)

言葉は通じなくても、ぼくとお兄ちゃんは最強コンビなんだ。それを今見せつけてやる！

《並んだ、並んだ、波乱のレースは二頭の叩き合いに纏れ込み……っ、またもやディープが競り勝つての一直線!!》

『いける——ッ!!』

『皆の夢、だと？』

肝が、冷えた。

『俺もそれは…同じだアアアアツ!!』

爆発した。

爆発された。

お兄ちゃんがつけてくれた差が一瞬で無くなったのは、明確にぼくの所為で。

そして彼の、強さの証。

ぼくの、苦い苦い大事な記憶。

《いやハーツクライ！ハーツクライだゴールインツ!!ハーツクライ手を上げました、
綱才綱。縋ア綱才手を挙げたツ…!》

出し尽くしたらヤバイ力は、出し尽くしたら本当にヤバかった。

何がヤバイって、すつごい筋肉痛。そしてダルい。ニンゲン達にシヨツクウエーフルフルするブを当てて貰ってもマシになった気がしなくて。

でもそれよりも、悔しくて悔しくて。

『…負けちゃった』

ハーツクライさんに、ぼくは負けた。馬生で初めての敗北だった。

サイレンススズカとかそれ以前の問題。目の前の相手すら見れてなかった、ぼくの完全な落ち度だ。

そして同時に、とても大事な経験にもなった……と、負け惜しみ抜きでも思う。

『強く、なりたい』

“ムハイサンカン”の“デープリンパクト”として。ぼくの出来る、ぼくだけの走り。
りで。

いつかハーツクライさんにリベンジして、その先へ。
あの異次元の走りに届くように。

そんな事を考えていると、慣れ親しんだ気配を感じた。思わず飛び起きたぼくが見たのは、愛しいお兄ちゃんの顔。

どうにも気不味いけど、それは向こうも同じよう。お互い同時に目を逸らして、それがおかしくてまた向き直る。

「ディーブ、ごめん」

お兄ちゃんが口を開いた。

「僕が情けないばかりに、お前に無理をさせてしまった。僕の心の傷を埋めようとさせてしまったんだね」

ニンゲンの言葉だから内容は分からないけど、ニュアンスは大体把握できる。明らかに自分を責めてるお兄ちゃんを慰めたくて、ぼくは柵から頭を出してお兄ちゃんに押し付けた。

ぼくがサイレンススズカになろうとしたのは僕の意味だ。それはお兄ちゃんの為ってつもりだったけど、同時にぼく自身の為でもあった。

あの鮮やかな逃げ足に、ぼくはどこかで惹かれて、囚われてしまっていたから。だからお兄ちゃんが落ち込む必要なんて無いんだよ。

「…優しいな、お前は」

そんな意志が通じたのか、お兄ちゃんもまたぼくの頭に頬を押し付けてくる。馬のそれとは違う、柔らかくて頼りない感触。でもこれが好きなんだ、ぼくは。

好きだから、頑張れるんだ。

「強くなるう、ディーブ。僕の新しい夢」

うん、強くなるう。ぼくはぼくの道を、お兄ちゃんの夢を乗せて走るよ。

「他の何物でも無い、僕と君だけの夢を、今度こそ」

もちろん、という意味を込めて嘶いた。

春も夏も秋も冬も超えて。ぼく達だけの夢を、焦がれ果てたその先へ。

勝利というただ一つのゴールへ、君と。

サイレンススズカ。

ぼくは君じゃない。そして君もぼくじゃない。

ぼくは君にはなれないし、君もまたぼくにはなれない。

でも、そう——きつと、乗せた人は同じなんだろう。重ねた夢は違っても、重ねた想いは同じだったんだらう。

そして君は、その道を走り切れなかった。道半ばで、君はお兄ちゃんと離れてしまっ

たんだね。

その無念が、あの日ぼくの前に現れたのかな。あれからどれ程経ったかもう分からな
いけれど、君は行くべき場所に行けたのかな。

だとしたら、今の僕は。

「タイプ」

あの敗北の後、色んなレースをお兄ちゃんと一緒に走り切って、海に向こうとかにも
行つて。そして見守られながら目を閉じる僕は、君と同じ場所に行くのかな。

「君は、僕の自慢の相棒だ」

お兄ちゃんの言葉に目を細めた。もう殆ど聞き取れないけど、褒めてくれる言葉が最
後まで嬉しかった。レースしなくなつてからずっと、近くに寄つても乗つてくれなく
なつちやつたのが心残りだけ。

僕は、僕の道を走り切つたよ。

ああそうだ、決着をつけよう。あの日、途中で終わった勝負の続きを。

お兄ちゃんの心を連れて行つた君と、お兄ちゃんの夢と共にあつた僕で。

どちらが最強で、最高な、お兄ちゃんの相棒なのかを。

光が近づく。これが終わりなのかな。

同期の皆、僕より後に来てね。

ハーツクライ先輩、貴方とも全力の決着を。是非向こうで、今度こそ。

エアグルーヴさんは：向こうでまた会えるかな。おっかないけど優しい馬だった。

お姉ちゃん、優しさをありがとう。幼い頃からずっと温かかった。

世話してくれたヒト、いつもご飯美味しかったよ。

お兄ちゃん。いつか、また。

さあ、サイレンススズカ。首を洗って待っている。

この衝撃が、君の異次元を揺るがすその日まで。

きつと、絶対に追いついてみせるから。

その決意を最後に、僕——ディープリンパクト号は、その生涯を終えたのだった。

そして、私が目覚めた。